

お釈^{しゃ}迦^か様ってどんな人 (中)

2000年12月2日 岡本 英夫先生

今朝、家を出る時の外の気温は零^{れい}度ぐらいいました。沖縄とは二十五度ぐらいの温度差があって、今、冷凍人間が解凍されているような感じがします。(笑)

今回も、初めての方、初めて仏教の教えを聞かれる方もおいでのようですので、できるだけ分かりやすくお話ししてみようと思います。いらしていただいて、ありがとうございます。

今日は前回の続きで、「お釈迦様ってどんな人」という題名です。一回で終るつもりでしたが、おそらく今回ともう一回、計三回ぐらいになるかと思います。

お釈迦様という方は、それこそどんな人かということなんですが、名前を見てみましたらいろいろな呼び方があります。本名はですね、旧姓と呼ぶべきかもしれませんが、ゴータマ・シッダルタというんですね。はっきりといつ頃の方かということは分からないようです。説は色々あるんですが、百年ぐらい食い違う。大体、紀元前五世紀から四世紀(前四六三~三八三頃)の人。一説には紀元前六世紀から五世紀、さらにはもう百年位^{さかのぼ}遡る説もあるようです。

その当時、インドは沢^{たく}山^{さん}の国に分かれていました。釈迦族の中心地がカピラヴァスツ、そこで王子として生まれたというわけです。そして後に仏陀となってゆかれた。

「仏陀」というのは、Buddhaという言葉の訳なんですね。仏教がインドから中国へ伝わった時に、中国でこれを仏陀と訳したのです。初めこの「仏」は、「佛」という字だったんですけど、簡略化したわけで、もちろん同じ文字です。

Buddhaの確実な翻訳がしにくい。そこで中国の人は翻訳しないで、ブツダ(仏陀)という発音のまま訳したんです。これは優れたことだったと思います。しかし同時にやはり翻訳しないと意味が分かりにくいですから、あえて訳す場合は「覺^{かく}者^{しゃ}」と訳しました。

この「覚」というところに意味があるわけです。目覚めるということです。覚者、目覚めた人。ですから、ゴータマ・シッダルタという人は、人類の歴史上初めて目覚めた人、仏陀となった人だと言われます。

仏陀の陀を省略して「仏」とも言いますね。仏というのは呼び捨てのような感じがするからでしょうか、様を付けて^{ほとけ}仏様とも言いますね。大体、仏はブツと発音するわけですが、私達は「ほとけ」とも発音します。これは、仏教が日本へ伝わってきた初めの頃、言われるようになったわけです。その理由ははっきりしませんが、中国で「仏」と訳す前に「浮屠」「浮圖」などと音写されており、その仏教を歩む人の意味で^け家がついて「ほとけ」となったという説。或いは、日本に伝来した時に熱病が流行し、その^{ほとけ}熱気から来たのだというような説があります。「ほとけ」、これは日本式の呼び方ですね。

「お釈迦様」と言う場合の釈迦というのは、ゴータマ・シッダルタは釈迦族の生まれで、釈迦族から出て遂に仏陀、覚者となった人という意味で、お釈迦様と言うわけです。

それから^{しゃくそん}釈尊とも言います。釈尊の釈は釈迦族の釈ですね。釈迦族から出た最も尊い人ということで釈尊というわけです。また「^{せそん}世尊」とも言いますね。これはこの世において最も尊ばれるべき人という意味で、仏の呼び方を表すいくつかの言葉の中でも代表的なものでしょう。これらが一番よく使われる名前かなと思われま

お釈迦様という方はどんな人か、その見方がいろいろあるようです。歴史学者は歴史的に、はっきりとした文献にもとづいて見ようとします。そうすると、私達の感覚で言えば^{りれき}履歴書のようなものが出来上がるわけです。もちろんそれはそれで大事な意味があります。

この会では二つの見方でお話をしようと思っています。はじめに、私達が教えを聞いています仏教、すなわち浄土真宗という視点から、つまり南無阿弥陀仏、念仏の教えに立ってお釈迦様とはどんな方か見てみましょう。これは面白いですね。

普通、その人がどんな人かという時、その人はその人、私は私で、生き方は皆それぞれ違うんだということになりますね。ところが、私が念仏の教えを聞いて

ゆくならば、私も又、お釈迦様の生涯と同じような一生を生きるんだ、というような形でお釈迦様のご一生が説かれてゆくのです。そういう大変大きな特徴があるんですね。

お釈迦様を単に歴史上の偉人としては捉えないんです。この人は本当に素晴らしい人だった、天才だったんだとか、そのような見方をしないんです。起こってくる具体的なことはもちろん違いますが、人生を貫いている原理と言いますか、要するにどういう一生を送ったのかということから見ると、お釈迦様の一生も、念仏の教えを聞いてゆくところから生まれる私達の一生も結局同じ一生なんだと。南無阿彌仏の教えを聞いた人は皆、このような一生を送りますよ、と言って出されているのが、実はお釈迦様のご一生なんですね。お釈迦様のご一生をモデルとして出してあるわけです。そこが大変大きな特徴ですね。

それから、そのお話が終わったら二番目の見方を申し上げようと思っています。お釈迦様という方は、目覚めて仏陀となって本当にたくさんの人を救ってゆかれた。そのお釈迦様は生まれる前は何かだったんだろうと。

これはちょっと奇抜な発想かもしれませんが面白いですね。生まれる前なんてあるはずがないと言えば、あるはずがないんです。しかし私達人間というのは、ものを想像してみて、それによってよく解るといふことがあります。ですからお釈迦様は生まれる前は、このような存在だったんだと言えば、なる程そうかと頷けるといふことがありますね。人々は随分力を注いで、お釈迦様は生まれる前はこうだったに違いないというように考えてゆかれたんですね。そのお話がたくさん残っています。ジャータカ物語というものです。

例えば、有名なお話ですが、お釈迦様は生まれる前は大きな鹿だったんだと。ある時、山が火事になって動物達が逃げまどった。皆、谷の方へと逃げていった。しかし、その谷には断崖絶壁があって、向こう岸まで少し距離があるわけです。飛び越えてゆける動物もいるけれど、小さな動物は飛び越えられない。そこに大きな鹿が現れて、こちらの岸と向こうの岸に前足と後足を伸ばして架けて橋になるわけです。その上を動物達に通らせる。背中の皮は剥げ、肉も血で染まってい^はく。そして最後は自分自身は力^{ちから}尽きて谷底へ落ちてゆく。その鹿こそがお釈迦様が生まれる前の姿だったのだと。そのようにして、悟りを開かれ目覚められた

お釈迦様の生涯の大きな徳というか、素晴らしさというか、そういうものを讃えていったんですね。

また、お釈迦様は童子であったというお話も出てまいります。童子とは道を求めて歩む少年です。少年の持つ無垢にして真っ直ぐで純真な求道心、その少年の姿に託して、限りなく真実の教えを求めていく歩みがあらわされます。そのお話もみてみようと思います。

さて、今は第一番目の視点、念仏の教えから見たお釈迦様のお話ですね。それを三回にわたって申し上げようとしているところです。

このお話が出てくるのは『大無量寿経』^{だいむりょうじゆきやう}という経典です。この中に、「八相^{はっそう}成道^{じやうどう}」あるいは「八相化儀^{はっさうけぎ}」という名前で行われているお話があります。その文章は二ページぐらいのわずかなものです。

八相というのは、人生における八つの相ですね。お釈迦様の人生を八つの大事な局面に分けて、その八つ全てが私達にとって大事な教えになってくるという意味合いで説かれています。成道というのは、悟りを開く、目覚めてゆく、仏陀となるということです。人は誰であっても、念仏の教えを聞くことによって、次のような人になるんだという位置づけで、この八相成道のお話が出るんです。具体的にはお釈迦様の生涯ですね。しかしお釈迦様だけがこのような生涯を生きるということではなくて、本質的には私たち皆がこのような生涯を生きるようになるんだということが言われているのです。

さて前回、初めの三分の一くらいをお話したんですが、簡単に振り返りながら、先に進んでいきましょう。

お釈迦様のご生涯を八相に分ける。その第一相と第二相は、不思議な内容です。生まれる前のこととして書かれています。すなわち、人生において解決しなければならない問題、人生の根本問題は何かということ、それを生まれる前の出来事で明らかにしようとするのです。

最初が処天相ですね。呼び方はいろいろあります。天の世界に処する。天人の世界を生きるということです。そのようなお釈迦様の姿が述べられます。天とい

うのは大変に恵まれた所、幸せに満ちたところです。有頂天という言葉もありますが、天の世界の中でも最高の、楽しみばかりの世界でしょう。

さて、私達の生き方はどのようなものか。基本的に何に向かって生きているかと言えば、苦しみを避けて楽を求めてゆく、これが生涯を通じて一貫した方針のようなものではないかと思えます。

私達の本音と言いますか、骨身にしみた考え方というのは、楽をしたいということでしょう。宗教というのはいろいろあるようだけれども、何の宗教でも人を救うというわけですね。それでもし救われれば、救われた後はどうなのかと言ったら、もうずっと楽な状態であることができるはずだ、という思いがあるのではありませんか。そうなるまでは、少々しんどいこと辛いことがあっても我慢しよう。結局何を求めているかという、宗教を求めているのではなくて、楽を求めているんですね。私達は何かそのような方向を人生のすべてのところで持っているように思えます。

しかし、人間というのは、本当に楽ばかり、楽に満たされているというようになるものだろうか。そうなると言われても何かおかしい。他の人が苦しんでいるのに、自分だけ楽ばかりだというのも何かおかしいですね。人生を楽を求めて生きようとしているところに人間の大きな問題点があるわけです。

お釈迦様は一生をかけて、その問題を超えてゆく歩みをされたのだ、ということが説かれるわけです。単に楽をするのが人間の生きる目的ではないんだと。「楽をしたい」という思いを、生涯をかけて超えてゆかれた。超えてゆく場が、正に自分の人生であったということですね。そういう問題を提起しているのがこの第一相、処天相です。

それから二番目、入胎相ですね。胎、これは母親のお腹です。胎内と言いますね。その胎内に入るということです。

私達が持っているもう一つの問題は、なぜこういう自分として生まれたのか、自分と言う存在を受け入れられないということです。これは特に思春期の大きな問題にもなってくるわけです。この間、ある男の子が、まだ小学二年生ぐらいなんですが、「なんで、こんな自分を生んだんか」と言い出したというんですね。お母さんが「どうしたらいいでしょうか」と言われてました。こういうことなん

ですね。小学生の頃からだんだんと、「なんで、こんな俺を生んだのか」と言い出していきます。要するに、この世に生まれ出た自分自身を受け止めることができないんですね。これ程辛いことはないわけです。もしその思いが溶けずに、生涯解決されないままでしたら、もうこれは大変なことです。

そこで、このような自分として生まれたということは、親が勝手に生んだとかというようなことではなくて、自分自身が、この自分として、こういう時代社会の中に自分の意志というか、自分の願いで生まれてきたんだということをはっきり言うことができれば、この問題は解決して、大きな転回が起こってくるわけです。第二相の入胎相はその問題です。ですから入胎というのは、誰から言われたとかでなくて、自分の意志で、自分の願いで、この母親のお腹の中に自分で入ったんだということです。

あの母親のおなかの中に入れば、もう間違いなくあの母親の性格や能力や様々の要素を受け継いで生まれてくる。決定的です。しかし自分はそれを選んだということです。勝手に親が生んだのではないんだと。自分で入ったんだと。そのように自分に対して責任を持って、自立して、独立して生きてゆく。そこで初めて足が大地についた生き方ができるわけです。

お釈迦様も自分の意志と願いで自分の母親の胎内に入った。だから責任は全て自分にありますと、そういう生き方を一生涯かけておこなった。処天相と入胎相が指し示す二つの問題、生涯をその問題を解く求道の間として具体的な克服の歩みを説いていく、そういう教えなんですね。

入胎の次は出胎です。胎から出る。要するに誕生です。誕生相、或いは出胎相。ここからが実際の人生の始まりですね。お釈迦様が誕生した時に言われたという有名な言葉があります。「てんじょうてんげゆいがどくそん天上天下唯我独尊」です。別の言い方では、「我れ世において無上尊となるべし」というのもあります。私は生涯をかけて「独尊」「無上尊」と言えるような存在になる。ここにこそ人間の本来の生きる姿があるからだ。こういうような意味です。人間とは何かを明らかにし、その本来の人間になることを誕生直後に宣言されたわけで、このことをテーマにして私は生涯を歩みます、とすることでしょう。

天上天下（この全世界において）、唯我独尊（唯だ、我れ、独りにして尊し）。独尊の独はひとり、自分を指すわけですが、私だけが尊いと言う意味ではもちろんありません。人は皆ひとりの存在なんです。このひとりの存在が、真に生きるということになしうる。そこに独り生きる独立ということがあるのです。だからこの独というのは、解りやすく言えば独立ですね。人というのは独立して生きることによって、初めて本来の人間として生きてゆくことができるんだと。こういうわけですよ。

逆に独立できない状態を畜生と言います。畜生というのは、畜養と言って家畜として養われて生きているものです。私達はいろいろな動物を家畜として飼います。その時に、よそへ行ってはいけませんから鎖をつけるわけです。仕事もさせます。そのかわり食事はきちんとあげるわけです。その動物が死んだらこっちも困りますからね。

一方、動物の方から見ると、主人からこの仕事をしろと痛い目に合わされているけれども、ちゃんと食事はもらえるし生きてゆけると。だから考えようによってはこれ程楽な生き方はない。我が身が保証されているようなものですからね。しかし、食べてはゆけるんだけど、自分のしたいことはできない。主人の命令に反して、いや私はこうするんですということができないんです。犬を散歩させる時、犬はそっちに行きたいというんだけど、主人は行くなとこっちに引っ張る。犬は主体性を持って生きることができない。そういうのを畜生と言います。

私達ももし、自分の主体性というもので生きることができなかつたら、もしそのようにして生涯を終ったら、人生とは本当に何だったんだろうかということになりますね。それは考えただけでもゾッとすることです。

人はひとりひとり、本当にその人の主体性で、その人の意志で、その人の一番深いところの願いで生きていくというのが本来の姿であるはずですね。仏教というのは、そのように生きる人を誕生さそうとしているんです。

私は今でこそ仏教に関わっていますが、三十年ぐらい前まではまったく仏教反対の旗をあげていたような人間なんです。仏教なんて聞いてどうするんだという感じで、一回も聞いたことがありませんでした。

その頃、漠然とですが、仏教はこうだからいけないんだと思っていたことがいくつもあるんですね。ひとつはこの主体性の問題です。二十歳前後くらいのその当時、本当に主体性を持って生き生きと、堂々と仏教をやっている人に出会ったことがなかったんですよ。ほとんどの人が、南無阿弥陀仏と念仏申しているけれども、何かショボンとしているような感じを受けましたね。これが仏教だったら、若い自分が仏教をやる必要なんてまったくないと思っていたんですよ。

しかし、それは私自身に見る目がまったくなかったんです。後に実際に仏教の教えを聞いていってみて、仏教ほど主体性というものを強く、明確に言っているものはないという感じがするようになりました。

しかしやはり世間一般というか、大体の人は、仏教には主体性というものがあまりないという感じを持っているのではないのでしょうか。けれども、決してそんなことはないんですよ。仏教ほど、いや、他と比べる必要はありませんが、仏教というものは主体性を持って、自分の願いを明確に持って、力強く生きてゆくものだと思います。

そのような主体性を持って生きるところに本当の自分の姿があるんだと。だから、独りにして、つまり主体性を持って生きるところにおいて、本当に尊い、本来の人間の生きる姿、そういうものが生まれてくるということです。

では、そのように言う主体性とは何かということが問題になってきますね。この天上天下唯我独尊というのは、お釈迦様が誕生なさった直後に七歩歩いて言われた言葉です。その時、大自然が、山や大地や木々が様々な形で震動したという表現になっています。震動して、全世界が光で満ちあふれるようになった、そのようなことが起こったと言うんですね。

大地はものを言えないし、拍手をすることもできない。大地が震動するというのが大地の表現なんでしょう。今、赤ん坊が生まれて、七歩歩いて自分はこういうような人間になるんだと言った。それを聞いて、全世界がそのとおりだと言ったんですよ。そのとおりだと言うことの表現が大地の震動というわけですね。

七歩というのは、「六」プラス「一」のことなんです。六は六道。六道というのはさっき言いましたように、苦しみを避けて楽しみを求める。これがどんなところにおいても人生の基本原理のようになって、私達は生きている。

苦しみの最たるものが地獄ですね。楽の最たるものがさっきの天ですね。地獄を避けて楽に向かって走る。楽になったような感じのする時は一杯あるんですね。けれども、それは本当の楽ではないから、又苦しみになってしまいます。それで、六道をグルグル回るということになる。いわゆる六道を輪廻する。本当の楽というものを得ることができない。結局、全体が迷いの中で、出口のないところを我々は歩んでいる。目覚めるということ、仏陀となるということがなければ、この輪廻を突破できないんです。生涯、六道を繰り返すことになる。

お釈迦様は一生をかけて、一生を舞台にして、流転輪廻を超えてゆこうとされた。それがプラスの一步ですね。合わせて七歩歩いた。もちろん誕生直後に歩くなんてことはあり得ないわけですが、お釈迦様がその後、仏陀になってゆかれたということ、たくさんの人に教えを説いて道に立たせていかれたという大変な歩みがあったわけですね。そういうことを踏まえて、遡って、お釈迦様がこの世に現われた誕生のその瞬間はこうであった、人生をこのようなものとして歩み始められたのだと、また、このように生きるのが人間の人生なのだと、こういう発想で説かれているのではないかと思います

そこで、お釈迦様のご一生をずっと見てゆく時の一つの大きなテーマは何かと言えば、先程の大地が震動するということなんです。誕生直後に大地が震動したのではなくて、もし、お釈迦様が生涯を尽くしてどこかの時点で、ほんとうに天上天下唯我独尊となったら、言っただけでなくて、本当にそうになったら、初めてその時に文字通り大地が震動するんです。それが、いつなるかというのが読んでゆく時の私の最大の関心なんです。どこでなるんだろう。お釈迦様は、この人生で何をするによって、主体性を持って生きてゆくという人間の課題を解決することができたんだろうと。これは大変興味のあるテーマですね。

その次は処宮相です。これはだんだんと成長してゆく中で、勉強したり、武道に励んだり、遊んだり、いろいろな営みをするを指します。それは人間として当然のことですが、しかし、そのことが将来問題となるのです。自分はこれではいけない、と。少年から青年への成長期の営みは、ある意味で、将来爆発する爆弾をそれとも知らず自分で自分の内に作り続けているようなものでしょう。この営みは必要不可欠であり、また同時に、やがて徹底的に自己自身によって批判

されていくものでもあります。成長期の歩みはそのように大切なもので、人間存在を根源から動かす意味をもっているわけです。それが処宮相です。

次は五番目の出家相ですね。ここから、いよいよ大事な歩みが実際始まってきます。出家というのは家を出るとのことなんですが、もちろん家出ではないわけです。「家」が何を指すかと言うと、自分なんですね。家出と出家の違いはどこですかね。出家は自分自身から出る。家出は家から親から他人から出る。そのような違いがあるのかもしれませんが。

出家は要するに自分から出るんですね。自分自身の中に様々な問題を感じるようになって、その解決を求めて自分から出るわけです。お釈迦様の場合は山へ入って、大変な厳しい修行をなさるということになりませんが、私達の場合も出家というものはもちろんあるわけで、又なければいけないわけです。もっとも山に入るということはほとんどの場合ないと思いますが。そうではなくて、わかりやすく言いましたら、例えばこういう仏教の会に出るとというのが一つの出家なんですね。今までの自分の考え方のままでいいんだというような状態では、仏教のお話を聞きに行こうということにはならないんですね。何等かの思いが自分の内に動いて、聞きに行ってみようということになるんでしょう。こういうのが出家ではないかと思います。

お釈迦様の場合もいろいろなことがあって出家をなさる。お釈迦様は王子でした。二十九才にでもなったらもういよいよ後を継ぐことを考えないといけない。しかし、父の王様は王子が出家をしそうな気配があるので、何とかさせまいとする。何をやってするかといえば、やはり世間のものなんですね。毎夜、^{えんかい}宴会を開いて飲んだり、食べたり、踊ったり、そのような楽しいことによって引き止めようしました。ところが、それをすればする程、お釈迦様の思いは出家へと動いていくわけです。

そしていよいよ出家をなさる。馬引き一人を連れて馬に乗って山の^{ふもと}麓まで行き、自分の着ていたものを全部その馬引きに渡し、自分はみすぼらしい姿で山の中へ入って行った。いわゆる、世間のものはそこで捨てるわけですね。

この捨てるということが、一つ考えなければならない問題ですね。私の生活の中で捨てなければいけないものは何かということです。私達は、自分のものにし

たいという思いは一杯ありますが、捨てるということはなかなかしません。皆さんの家はどうか分かりませんが、倉庫を開けるとドッと物が出るような感じで、もうこれは捨てたらどうか、というようなものが一杯あります。

私の人生において、捨てなければいけないものがあるということなんです。また捨ててはいけないものがあるということなんです。お釈迦様も初め、勘違いと言うと失礼な言い方になりますけれども、捨ててはいけないものを捨てようとなさいました。出家をして山で六年間苦行をなさった。苦行の苦は、先程の樂の反対の苦なんです。

私達は、放任状態というか、何も規制を加えずに自由に好きなように生きてごらんと言われたら、樂を求めていくわけですね。樂を求めていって、それによって本当に樂を得ることができるかということ、それはできないんです。問題は一体何かと言うと、その樂を求めようという思いが問題なんだと。そうさせているのがいわゆる欲ですね。欲、欲望を、仏教では貪欲とんよくと言います。貪欲を含めて一口で煩惱と言います。煩わづというのは煩わづ、悩なやは悩なやますですから、私の身を煩わづわせ、心を悩なやますもの、そういうものが私の中にある。それを煩惱と言う。煩惱という心の働きがある。その代表のようなものが貪欲です。何でも自分のものにしたいという欲ですね。樂になりたいという、猛烈な思いがあるわけです。自分の煩惱はそっちに向かって行こうとする。これがあるから人生を失敗するし、うまい具合にいかないんだというふうになってしまう。だから樂をしたいという欲望を押さえ付けなければいけない。できるならばそれを無くさなければいけないと考える。これが無くなったら、もう虚心坦懐きょしんたんかいに人生を生きていけるんだと思う。

ところが、樂をしたいという思いは簡単には無くなりません。無くそうと思えば思う程、抵抗して出てくるわけですね。そこでその樂を無くそう、そういう欲望を無くそうというような行為が物凄い苦行になってくるんですね。苦しいと感じるということは、それ程私の樂を求める欲望というものが強いということなんです。

それでお釈迦様は、当時の最高の行をする人に付いて、煩惱を超え、迷いを超えていくというような修行をされました。それでどうなったかと言うと、できなかったんですね。煩惱を消し去ることができなかった。ご覧になったことがありますかね。釈迦苦行像。お釈迦様が苦行をなさっている像がありますね。もちろ

ん後の人が作ったんですが。それこそ骨と皮だけの骸骨のような像があります。相当な苦行をなさり、死臭も出てきて、死の直前のようなお姿になったんだと言われていてます。

お釈迦様はそういう苦行に六年も耐えられた。大変な忍耐力です。だから、ある人はこう言いますね。もしその時お釈迦様が、自分は悟りを開いたぞ、煩惱を全部消し去ることができたぞと人々に言ったら、皆信用したんではないかと。

けれども、本当には煩惱を超えることができていないというのを本人はよく分かっていますね。六年間苦行をしたけれども煩惱を超えることができなかった。苦行をすることの無意味さを知るわけです。それは苦行がどうこうと言うんではなくて、煩惱を本当に自分の中から無くしてしまうことができるような自分ではないんだということに気付いていかれるんです。

仮に自分だけが悟りを得ても、他の人達は関係がないんですね。他の人達と関係がないような道を歩んで一体何になるんだろうというようなことを感じられて、お釈迦様は山を降りるんです。そして、人々がいるところに帰っていくんです。

ここには大きな転換があるわけですね。山を降りて川につかかります。川というのは水が流れているところですね。その水につかる。それを経典は「金流こんるに沐浴もくよくす」とあらわしています。この川が尼連禪河という川ですね。その金の川の流れの中に我が身を浸すわけです。では、なぜその時に、金の川の流れと言ったのか。金という文字が示す意味はなにか。眞実こんじきは色で表わせば、金色なんですね。その眞実のはたらきを阿弥陀仏と言います。この場合の仏と言うのは私達を目覚めさせるはたらきです。

お釈迦様は目覚めた人。お釈迦様をして目覚めさせたもの、それが阿弥陀仏です。その阿弥陀仏は色も形もない目覚めさせるはたらきですね。けれども、色も形もなければ私達にはよく分からない。もうお手上げの状態でしょう。だからこれを色とか形のあるもので仮に現わしてみようとする。それを像と言うんです。仏様を仮りに現わした像を仏像と言う。

映像というのもそうですね。映像というのは、スクリーンに写すと人が映るわけです。その映った人はここはいない。ここにいないけれども、それを見たら、あたかもここにいるように見えるんですね。そういうのを像と言うんです。

仏像もそうですね。仏教の歴史の中で沢山の人が仏像を作ってきた。それを作っている本人は、色も形もない阿弥陀仏を念じながら、何とか皆に分かるように形にしようというわけですね。阿弥陀仏の像を作った時に塗る色が金色なんです。金というのは真実の色、このようにずっと表わしてきたんです。

ところで、こういうようなことがあります。仏様の願い、阿弥陀仏の願いに「悉皆^{しっかい}金色の願」というのがあります。これは、人々をことごとく皆、金色の色にしたいという願いです。私達は一人一人色が違う。色が違うと言ってもこの色というのは、黄色人種は黄色、白色人種は白というそういう色ではないんですね。それはそのまま考えてもらってもいいかもしれませんが、人間というものは色々な要素があるでしょう。それを色と形の二つで表わしてみようというわけです。どんな人をも金色にしたいというんですね。同じ金色にすると、皆が同じ人間になるという意味ではないんです。金色は真実という意味ですから、全ての人を真実に生きる人にしたいという願いですね。ですからその具体的な内容は、さっき主体性ということを行いましたけど、誰からも引きずり回されないで、あなたはあなたの主体性で生きてゆく。その生き方が真実に叶った生き方となる。こういう人を生み出していきたいというんです。

普通、平等ということ簡単に考えると、同じようになるのが平等かと思いますが、もちろんそんなことはないですね。同じことをするのが平等ではない。しかし、平等だからやっぱり同じでないといけないんです。どこが同じかと言うと、皆金色であるという点で同じなんだと。後は全部違うんです。皆個性があって、皆違うんです。しかし、皆金色をしている。すなわち真実に生きているという点で同じなんだと。そこで初めて、皆平等だと言えるんだというわけですね。それが仏教がいう平等なんです。皆同じ金色にしたい。それが阿弥陀仏の願いとして言われています。

この金という意味を、今度は私達の側から考えてみましょう。私という人間を色と形で表わせば、色は金色になりたいというのが私の本来の願いであるはずなんです。自分だけではないですよ、皆がね。皆が真実に生きる人になりたい。金色というのはそういう意味ですね。

お釈迦様は山で長い間苦行なさって、山を下りて疲れた我が身を流れの中に置くわけです。その流れが金の川の流れです。川というのは水が流れているわけで

すから、水は自分の身に当たるわけで、その中に身を置くと水の力を感じる。それが全ての人々が真実に生きたいという、全ての人々の願いを表わしているわけです。その願いが身にあたるんです。自分は最初、自分だけ山に上がって、自分だけ煩惱を無くして救われようと思ったがそれは間違いだったと。一人の人だけが救われるのは、本当の救いとは言えないんだと。そうでなくて、皆同じ人間なんですから、皆と共に救われていくんだと。それがこの金の川の流れの力を感じたと言うわけです。人々も自分も同じ人間である、同じ煩惱を持った人間である、皆も真実に生きたい、自分も生きたい、その皆の願いを受けて皆が救われていく道を自分は見つけていこうというように大きく変わっていくわけです。

お釈迦様が出家した時、お父さんがそれを知って、これ以上引き止めることはできないので、王子で大事な人ですから、家臣を遣わした。強い五人の人と一緒に出家さすんですね。そして一緒に修行さす。一緒といっても同じ部屋で修行するんじゃないくて、当時の修行の仕方はこのへんに一人、向こうの丘の上に一人、こっちの谷の方に一人というふうにバラバラなんですね。そのように離れていて、なおかつ一緒にというような形で修行していく。本当に一人一人の歩みであるわけです。その一人一人の歩みを象徴するのが伝説上の動物で、角が一本だけ生えている麒麟きりんですね。麒麟が自分の角が生えている方向に向かってひたすら歩いていく、その麒麟のごとく修行していくんだと言うんですね。その伝説上の動物、一本角の麒麟が今のキリンビールのキリンですね。あれを飲んでまっすぐ歩けるかどうかよく分かりませんが(笑)。

キリンのごとく一人一人自分の道を歩いてゆく。その五人の仲間も一緒に修行した。彼等も六年間修行するんですから、相当なところまでいったのでしょ。しかしお釈迦様は、六年経って山を降りて川の水につかったんですね。その有様を見て、五人の家臣達は、お釈迦様は墮落したんだというふうに見た。もう修行を止めたわけですから墮落したんだと。そうとしか見ることはできな いんですね。しかしもちろん、そうではなくて、お釈迦様は自分一人だけが救われる道を止め たんです。

皆が救われる道、それを大乘と言いますね。自分だけ救われて善しとする道ではなくて皆が救われる道です。これは大きな乗り物です。大きな乗り物に皆が乗る事ができる。乗り物というのはこれは喩えですが、船を想像すればいいのでし

よう。迷いのこの岸から悟りの岸までこの船で行くんだという発想かもしれませんが。初めお釈迦様は、自分一人だけが乗っていくような船、一寸法師の自分しか乗れないような船だったんですね。それは間違いだと。本当の人間の道は誰が乗ってもいい、それこそ万人が乗れるようなもの、これが本当の人間の道だと。乗というのは乗り物なんです、具体的には教えを指しますね。皆が救われてゆく教えです。これを明らかにしようとするわけです。そしてやがて、大乘の教えというものを明らかにしていけるわけなんです。

さてもう少し細かなところを見てみましょう。金流に沐浴した次に、「天が樹枝を按ずる」というような文章が出てきます。按ずるというのは樹の枝を引っ張り降ろすということです。お釈迦様が流れの中に入って沐浴している。岸に上がれない。岸に樹が生えていますが、枝が高い所にあるものですから届かない。その時に天が力を貸して天の力によって、この枝をずっと下げるわけです。それでお釈迦様はこれを掴んで池から岸に上がっていくんですね。

これは面白い文章です。ちょっと注意をしてみてください。池から岸に上がるんですね。さっきは流れといいました。流れと言うのは川ですね。今度は池です。池というのは水が溜まっているところですね。流れがいつのまにか池に変わっているんです。これをどういうふうに理解すればいいのかということなんですが、このような理解の仕方が一つあります。

初めは川だったんです。金の川ですから、さっき言いましたように人々が皆、真実に生きたいと願っている、身体に水が当たって水の流れを感じるようにその人々の願いを感じて、それを受け止めて、よし自分は皆が救われる教えを明らかにしていこうと思ったんです、初めは。しかしいつのまにかその水の流れが止まったんです。マンネリ化したんでしょね。いつのまにか、やっぱり元の自分だけの世界に戻ったんでしょ。だから人々の願いを感じなくなった。麻痺まひしたんでしょかね。水の流れを感じないので、そこは池になってしまったんです。そうしたら、これは本来の姿ではありませんから、早くそこから出さないといけないんですよ。誰が一体出すか。誰もいないんです。それで天が、天というのはこの場合は大自然というか全世界というような感じですね。全世界がその力でもっ

て樹の枝をお釈迦様の手の届くところまで押さえて、お釈迦様を引っ張り上げた。こういう文章なんです。

私は、お釈迦様という方は悟りを開いたといいますから、物^{もの}凄^{すご}い大変なお方、悟りきった仏様というようなお釈迦様観というのを持っていたんです。しかし、念仏の教えという視点で見たお釈迦様のお姿というのはそうじゃないんですね。はじめに言いましたように、我々も、もし念仏の教えをずっと聞いていくと、遂にこのような一生を送るんだという視点で見たお釈迦様ですね。お釈迦様も私達も同じなんだということが、こういうところに行われているような感じがします。

お釈迦様は山で修行していたが、自分一人の煩惱を超える、自分一人が救われるんではダメだと思って山から降りてきた。人々がいるところへ帰ってきたんですね。そして、川の流れて人々の願いを受け止めて、よし解ったと、そこまで来たんだけど、又、もとへ戻るんです。自分さえ救われればと言いつころへ。それを象徴するのが池なんです。水の流れが止まってしまったんです。止まったというのはお釈迦様から見て止まったんです。もう何にも感じないようになった。お釈迦様も迷っています。本当に悟りを開かれるまで、何度も越えねばならない山があるんですね。その時に、全世界が力でもって枝を下げた。それでやっと池から脱出できた。自分個人だけでいいという思いを遂に超えたのです。

それから川を出て、大きな樹がありまして、その樹のもとに座って、そこで長い間瞑想して遂に自分の内にある魔というものを超えていくんですね。それを降魔相と言います。魔と言うのは、キリスト教や、ヨーロッパでは悪魔と言いますが、その悪魔というのとは違うんです。魔ですね。魔と言うのは、さっき言った煩惱のはたらきです。煩惱のはたらきとなってこの道を求めて歩もうとする私の歩みを阻止するんですね。これが魔です。その魔はどこにあるのかと言ったら、私達それぞれの心の中です。その魔は、もし、私が道を求めて歩もうとすれば動き出してくるんです。歩むなと言って、歩む必要なんかないんじゃないかと言って魔がものを言ってくるんです。こっちが求めずに安^{あん}穩^{のん}とした生活をしておれば魔は何にも言わない。それでいいそれでいいということですからね。

私が道を求めて歩もうとすれば魔が動き出してくる。その魔と対決し、魔を降伏さす。どんな煩惱が起こってきても、その魔を降伏さす。降伏というのは、昔、戦争をやって、相手を降伏させて自分の味方にするでしょう。あのようなも

のでしょうか。だから、敵を殺す必要は必ずしもないわけですよ。生かしておいて自分の味方にすればいいわけです。煩惱はまったく消し去ることはできません。しかし、降伏さすことはできるんだと。相手に参ったと言わせればいいんだと言うわけですね。そういう降魔相と言うのが次の段階ですね。

お釈迦様が川から上がって、一本の樹のもとに座って瞑想をし、遂にこの魔を降伏さすわけですね。そして、悟りを開かれることになります。

その樹のもとに座る時に出来事が一つあるんです。樹の所にやってくる間、その姿をある童子が見ていました。童子の名前を吉祥と言って、お目出度いという意味です。童子は少年ですね。この少年が、お釈迦様がやって来るのを見て、この人は普通の人とは違う何かがあると感じるんですね。何かと言うのは、やがて悟りを開いて仏陀になる兆しを感じたんです。お釈迦様が樹のもとに座ろうとする時に、この童子は草を刈っていたんですが、自分が刈ったその草を差し出します。

お釈迦様はそれをもって、その上に座るんです。その差し出した草が、実は意味を持っている。この童子も又、救われないんですよ。人は皆そうなんです。それでももしお釈迦様が悟りを開かれたならば、どうか自分に教えを説いて下さいと。そういう気持ちで草を差し出した。しかしそれは童子一人だけの願いではなくて、言ってみれば人類全体を代表しているような願いですね。その願いを込めて、草を差し出したんだと言われます。お釈迦様もそのことが分かっていて、悟りを開いたならその教えを説こうと、それを貰って座り、悟りを開かれるわけですね。そういう場面があります。

もう時間がきました。そろそろ終わらしましょうね。

それで一つ考えて頂くのと有り難いんですが、お釈迦様は何故^{なぜ}魔を降伏さすことができたかです。これは本当に知りたい問題ですね。

それからもう一つ面白い問題は、悟りを開いてさっきの吉祥童子との約束で教えを説くわけですね。説く段になったけれども、お釈迦様は説かれないんです。約束を破るんです。初めは、何故教えを説こうとされないのかという問題があります。結局しばらくして説くようになるんですが、その教えを説く段階が転法輪相、法輪を転ずる相です。車輪が色んな人のところ、色んな地域へとどんどん転

がっていくように、それ以降、お釈迦様はずっと仏教の教えを説いて回られました。後半生は転法輪の生涯を送られたんですね。

そして、最後は涅槃に入っていく。亡くなっていかれるということなんですけれども、単に死んでいくということではなくて、涅槃という真実の世界に入っていく。

先程、お釈迦様が天上天下唯我独尊と言われた時、大自然が震動してそのとおりだと讃えたということがありましたね。そのような人生をこれからお釈迦様が生きていくんだということなんです、それが、お釈迦様の生涯の一体どこで実際に大自然が震動してお釈迦様を讃えたか、ですね。大きな問題です。

時間も来ましたから、この次にそのようなことをお話しします。(続く)